

2. 随分印象が変わった私の「布留遺跡」観 大布留展 & 関連講演会に参加して

鍛冶工房だけではない姿が見えてきました

2.1. 抱いてきた布留遺跡のイメージ 「初期大和王権の鉄器生産工房」

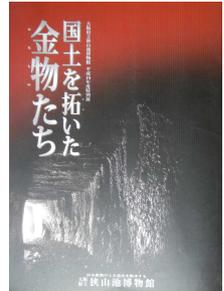
狭山博物館 平成19年特別展「国土を拓いた金物たち」図録より

古墳時代の大和の鉄器工房 特に布留の鍛冶工房群について、その役割を含め、狭山博物館 平成19年特別展「国土を拓いた金物たち」図録に判りやすくまとめられていましたので、転載させていただきます。

武器・農工具などの実用鉄器などを本格生産して、新しい国づくりを進める初期ヤマト王権の主要鍛冶工房

として機能する姿が記されている。一方 今回 大布留展で見た布留の鍛冶工房は弥生時代から続く祭祀に使われる玉作りに連携して働く鍛冶工房の姿が主要と映りました。布留遺跡の鍛冶工房には 弥生時代から続く玉作り工房の工具などの小さな鉄製品を作り続ける姿と新しい時代の要求に対応する大型鉄器作りを 始める姿 の2つの要素がある。

布留遺跡の時代には まだまだ 近畿・ヤマトでは 国づくりの初期より 祭祀の鉄のイメージが強いと展示を受け取りました。本当はどうなのでしょう 古墳時代大和の鉄についてどう考えましたか ひとつ面白い疑問と感じています。



◆ 布留遺跡の鍛冶工房の姿《1》 新しい国づくりの鉄

武器を作った証拠????? 布留遺跡で大量に出土する刀装具 《柄・鞘・柄頭など》

初期の鉄器生産

弥生・古墳時代の鉄器は、打ち叩いて整形する鍛冶の技術で作られる。鑄造技術は七世紀まで見られない。しかし弥生時代の鉄器は、中期後半に少しだけ見つかると鉄戈など以外、簡単な加工がなされただけである。高温を要する鍛接の技術は認められず、鉄板を加熱して叩きのぼして曲げる、あるいは切断することが基本だ。

高温で操業する本格的な鍛冶技術の出現は、古墳時代初期からである。鉄を差し込んだ鍛冶炉に、ふいこで送風して炉内の温度をあげ、鉄に含まれた不純物が垂れ落ちて椀形滓ができる技術、その鉄を何度も叩くことで表面が火の粉になって飛び散り、鍛造剥片や球状滓の生じる技術である。それは福岡県博多遺跡群、奈良県纏向遺跡などで見つかると「一点と線」の状況で、資料数は少ない。

古墳時代中期、本格化する鉄器生産

五世紀になれば、鍛冶に関連した遺物の見つかる集落が増え、状況は一変する。そこは韓半島系土器が見つかることが一般的で、渡来人が住みつき、最新の技術で鉄製品を作ったことを示している。畿内では、奈良県布留遺跡や南郷遺跡群、大阪府大泉遺跡や森遺跡では多くの鍛冶関連資料が出土することから、ここは大和王権に鉄製品を供給した專業集落と考えられる。布留遺跡は物部氏、南郷遺跡群は葛城氏、いずれも大家族に係わる集落だ。布留遺跡の資料で当時の鉄器生産を紹介しよう。

布留遺跡は、布留川が形成した扇状地に立地する、

東西約一五キロメートル、南北約一キロメートルに居住地・祭祀場・生産工房が密集する巨大集落である。首長居館と多数の韓式系土器が見つかる。居館は石垣を巡らせるりっぱなもので、そこに有力者が居たことがわかる。後者は韓半島から持ち込まれた土器、あるいはそれを真似た土器で、渡来人と関連を物語る。有力者は渡来人の保持した最先端の物、技術情報を得ていたのである。鉄器の他、ガラス玉、木器などの工房に係わる遺物が出土し、首長居館に付属する工房を含み込んだ集落と言えよう。

多数のふいこ羽口(以下、羽口とのみ記載)と鉄滓が見つかった。鉄は鍛冶炉の中で焼き、叩いて不純物を除去することによって、良質の鉄になる。それには高温が必要で、空気を吹き込む必要がある。ふいことは、炉内の温度を上げるために空気を吹き込む装置であり、その間をつなぐ送風管が羽口である。

羽口の先端は、炉に差し込んで高温を受けるので、溶けてガラス質になる。椀形滓とは、鉄に含まれた不純物が熱で溶けて滴り落ち、鍛冶炉底の形に固まったものである。

堅穴住居から鉄鉗が見つかった。五世紀以降に見つかる鍛冶具の一種である。焼いた鉄素材を挟む道具で、挟んだ素材を鉄床の上に置き金錘で叩いて製品に仕上げる。甲冑などを作るには、薄い鉄板に微妙な湾曲をつけるこれらの工具が必要である。この段階に導入された最新の鍛冶技術である高熱に対応する必需品であった。

布留遺跡では、稀なことに刀剣類の柄や鞘が多数見つかった。刀剣の本体は錆びてなくなつたかもしれないが、木製の未製品があるので、武器類を作つたことは確かである。

様々な形の柄がある。手を固定するための革帯を着ける孔が開けられており、実用品であることがわかる。後期に見られる金銅装の円頭大刀や頭椎大刀の祖形らしき資料は驚きで、古墳の副葬品を見るように。鞘の内面には、刀や剣の形のくり込みが残っている。短剣や短刀のほか、長い刀剣もある。着色しないで白木のままのものもあるが、黒漆や赤漆を塗り、直弧文などの文様を刻んだ柄は、有力者が持つたのだらう。武器を管理した物部氏にかかわる器材と見られる。



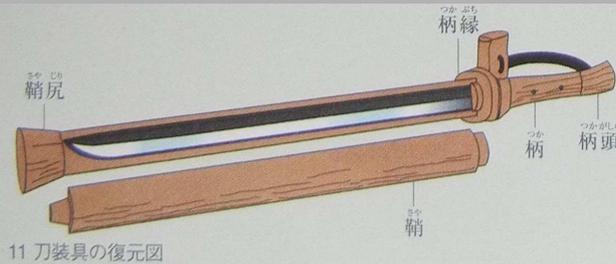
9 黒漆と文様(渦文)で飾った刀剣の柄・長8.4cm / 奈良県布留遺跡 / 5世紀



10 刀剣の柄 / 下から2点目長40.9cm / 奈良県布留遺跡 / 5世紀



8 刀剣の柄 中央長13.2cm / 奈良県布留遺跡 / 5世紀



11 刀装具の復元図



7 復元した刀剣の柄 / 奈良県布留遺跡

武器を作った確かな証拠 ??? 布留遺跡で大量に出土する刀装具 (柄・鞘・柄頭など)

狭山博物館 平成19年特別展「国土を拓いた金物たち」図録より

◆ 布留遺跡の鍛冶工房の姿《2》

大布留展で知った布留の鍛冶工房の姿 弥生時代から続く 祭祀・玉作りに連動する鍛冶工法か?

玉加工・祭祀関連遺物と一緒に常に出土する布留遺跡の鍛冶関連遺物。

布留遺跡の生産工房群は 玉作りに関係して機能していたのではないかと・・・鉄器製作ばかりでなく 玉作りの側面も

こんな 古墳時代の布留鍛冶工房群の姿は 何を意味しているのか、また ひとつ新しい疑問です。



27 採集された玉末成石と石核、削片 三島(宮ノ東・宮ノ西)地区 5~6世紀

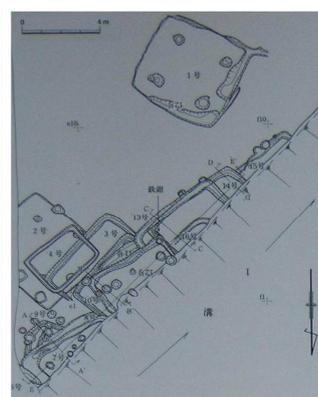


28 磁石 鑛別口 鍛冶 左:地之内(鎌ノ下・ドクワ)地区 5~6世紀 左地の磁石の長8.29.0cm



15 三島(宮ノ東)地区出土の木製釘 5~6世紀 釘の長さ14.2cm

玉加工・祭祀関連遺物と一緒に常に出土する布留遺跡の鍛冶遺物 また 刀装具も大量に出土する



鍛冶・玉工房跡とみられる 地之内地区の大溝で画された南東部 大溝に接する16棟の方形竪穴建物群

布留の生産工房群は非常に規模が大きく 鉄器生産は本格的

「大布留遺跡展」図録より整理

2.2. 随分印象が変わった私の「布留遺跡」観

大布留展 & 関連講演会に参加して

近畿で鍛冶工房が出現してくるのは 弥生時代後期 丹後の奈良岡・大阪星が丘の鍛冶工房遺跡などで、その後 古墳時代になると 大和に初期ヤマト王権が成立してゆく過程で小規模な鍛冶工房が畿内の各地に生まれ、次には 王権を支える豪族たちが朝鮮半島の渡来鍛冶集団をも取り込んで営む大規模な鍛冶工房群〈布留・大泉・忍海(脇田・南郷)・森〉に集約され、さらに日本で製鉄が始まる前夜には大泉に集約されてゆく。

そんな近畿の鍛冶工房出現の歴史の中で 2009年1月 淡路島で 弥生時代後期の国内最大級の鍛冶工房村五斗長垣内遺跡が見つかった。

ここでは 23 棟もの鍛冶工房関連建物や数多くの鍛冶炉遺構や家事遺物が見つかり、この遺跡がヤマト王権が成立してゆく過程でどんな役割を演じたのか 興味深々であるが、まだよく判っていない。

弥生時代の鍛冶技術は まだ、鉄素材を高温に加熱して、素材を鍛造成形する技術はなく、もっぱら 鉄素材を鑿切加工して鉄器を作る技術が主であった。

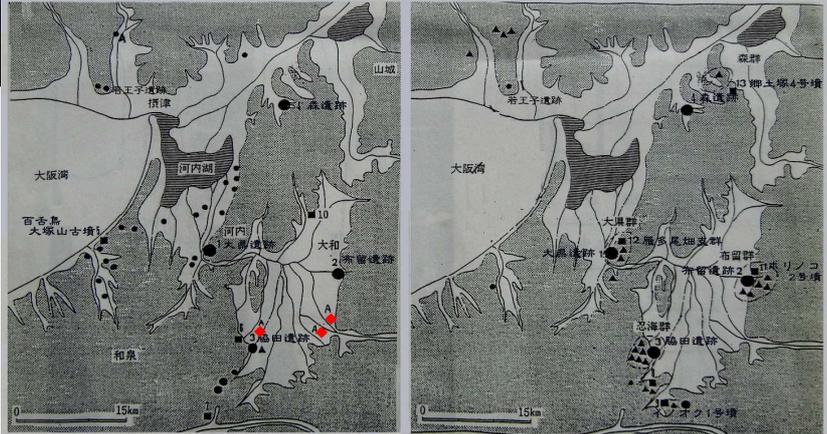
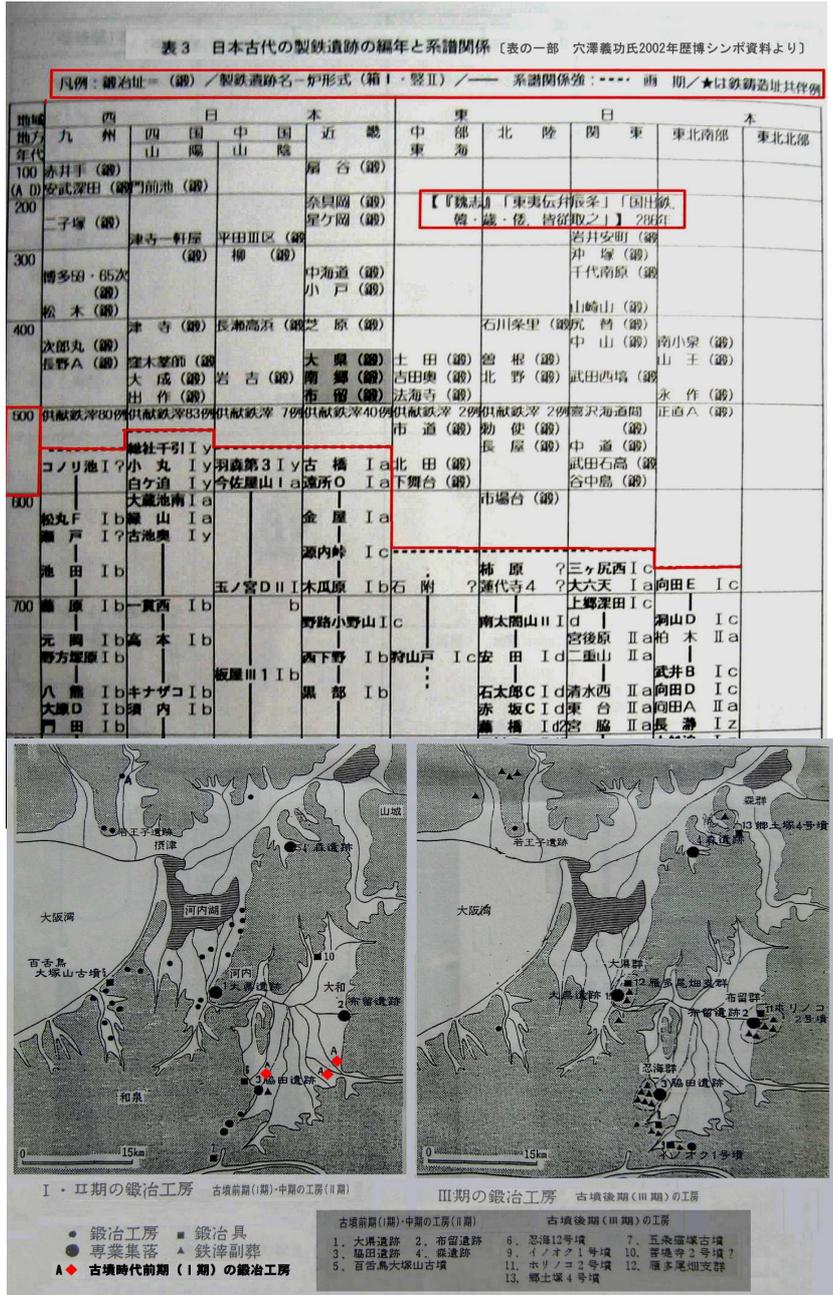
3 世紀頃 北部九州では鉄素材を高温に加工する技術が伝来し、博多遺跡などでは鍛造加工して鉄器を作る高度な鉄器製造技術があった。

大和の纏向遺跡では この北部九州の先進技術が伝わっているが、遺跡の出土鉄器を見る限り、製造された鉄器の主はまだ弥生の鑿加工が主で、一部鍛造加工されたものもあるという。

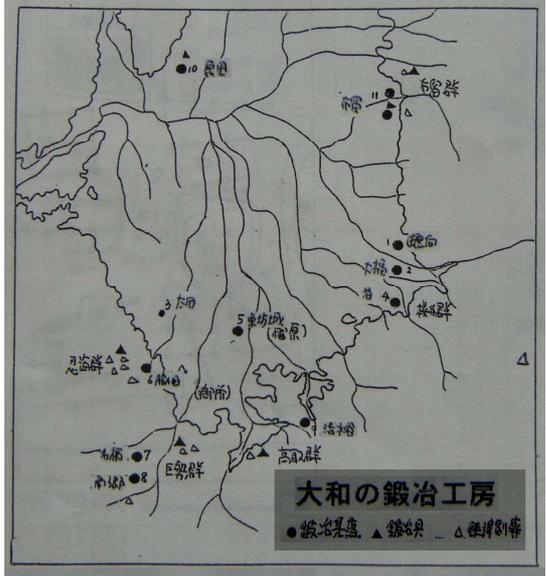
畿内は鉄器の後進地といわれるのですが、五斗長垣内遺跡の出現 そして纏向遺跡の先進鍛冶技術取込みがその後の大和政権に統一国家成立に大きな影響を与えて行ったであろう。

前置きが長くなりましたが、「大和王権の軍事を担った物部氏の本拠地の鍛冶・鉄器工房が布留遺跡」と捉えて、「どんな新しい技術が初期大和王権の鍛冶工房に入っているのか それを見たい。それが大和を国の中心にしていったのではないかと。」と。

でも 今回 布留遺跡について「大布留展」を実際に見て、図録に書かれた遺構・遺物の出土状況 そして講演会聴講で聞いた話を総合するとどうも、布留遺跡について 思い込みが強すぎたのかなあ・・・と。



古墳時代の畿内 大和の鍛冶工房の変遷



布留遺跡では 鍛冶工房群と見られる竪穴住居群遺構や鉄滓・鞆羽口や砥石などが出土しているが、残念ながら鍛冶炉や鍛冶工房の内部配置はよく判らず、意外すぎるほど膨らましていたイメージとのギャップが大きいと感じました。

また、鍛冶工房遺構から 鉄の遺物が数多く出るとは少ないと承知はしているのですが、国の軍事を担った集団の中核鍛冶工房遺跡。そして 弥生から古墳時代の移り変わりに大きな役割を果たしたといわれる「鉄」。

当時 半島から多くの鍛冶集団が日本にわたってきたといわれ、韓式土器など布留の遺物からもそれが見取れる。

その先進の鍛造鍛冶・そして製鉄へとつながる精錬鍛冶の遺構がひょっとして 見られるのではないかと ・ ・ ・ と思っていましたが、どうも違うようだ。



布留遺跡が眠る布留地区を石上神宮李前の岡から眺める

日本各地に興った国々が争った弥生の終末期から古墳時代前期へ

でも「この初期大和王権の時代は 軍事といっても《戦闘》というより、

《祭祀》とのつながりが強いのではないか??？」

布留遺跡では そう思えるほど 祭祀遺構・遺物が数多く出土している。

また、祭祀にも関係すると思われる玉工房と鍛冶との結び目を示す大量の玉遺物が遺跡のあちこちから出土している

日本海沿岸諸国の鍛冶工房そして四国阿波の矢野遺跡など同じく、「玉作りの生産工房の工具作りの鍛冶工房」というのが、この布留の鍛冶工房の性格のように見える。確かに 多数の刀剣装具類が出土しているが、これも鍛冶作業は威信材の装飾副次作業といえなくもない。そう 考えると布留の前の時代 邪馬台国 祭祀をつかさどる卑弥呼の女王国にもつながるのですが ・ ・ ・ どうか ・ ・ ・ ・ ・

一方 軍事としての武器・武具を頭に置くと鉄族は別にして イメージ的には 厚い鉄素材を使った鍛造鍛冶が目に見え、国土開拓の農具もそうだろう。 北部九州博多遺跡では いち早く自分たちの技術にした高温加熱加工・鍛造技術を使って、鉄板を重ねて厚手の丈夫な鉄器など 鍛造加工技術がどんどん進んでいったという。

布留遺跡の鍛冶工房の先進性を示すイメージがないのは 大型鉄素材やトピックス的な鉄器遺物が出ていないためか ・ ・ ・ それとも そんなニーズは まだこの時代には必要なかったのかもしれない。

大布留展でも布留遺跡の鉄製品出土遺物をきっちり 見た記憶がなく、インターネットを当たったり記憶をたどったりしているのですが、よく判らない。ひょっとして 鉄族があったかもしれませんが、この時代 まだ 大きな鉄製品が作れる工房は北部九州に限られ、小さな製品は腐食でなくなって出土しないのかもしれませんが。

布留遺跡の鍛冶工房と玉作りとの関係が頭にあったので 展示されていれば、その工具類を確かめたはずと。

6 月に参加した檀考研での講演会で 布留遺跡の鉄製品として 小さな鑿加工品がいくつか スライドで映し出されているのを見ましたので、クリヤーではありませんが、布留の鍛冶工房はまだ 弥生時代の鍛冶が主体だと思われます。

ちょっと 鉄器万能論から少し後ろに下がった目でこの古墳時代の大和の鉄器工房群を見ないといけないのかもしれない。

頭は色々揺れ動くのですが、まだ、布留遺跡の未調査部分も多く、布留の氾濫原の広がりを見るとこれから何が出てくるか 興味深々。大和の古代をひっくり返す遺構・遺物がまだ数多くうまっているかも ・ ・ ・ ・ ・

それにしても 天理教の諸施設や天理大学の広大な敷地がそっくりそのまま布留遺跡。やっとな布留遺跡の遺構イメージが今回の大布留展参加でわかってきました。 布留遺跡と古墳時代の鍛冶工房のイメージにはまたひとつ不思議が増えましたが ・ ・ ・ 長いことの疑問が吹っ切れた天理参考館での大布留展参加でした。

今まで 布留の鍛冶遺跡はどこだろうかと思いつつも、確かめもせず、石上神宮や山之辺の道を歩いたものですが、今回はしっかり これら布留遺跡の色々な遺構が埋まっている場所をじっくり歩いてこようと。